

東北大学東北アジア研究センター・外部評価 2018

日時：2019年2月27日 13:30~16:30

会場：3F 小会議室

参加者

〔外部評価委員〕敬称略・順不同

田畑伸一郎（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授）

佐々木史郎（国立アイヌ民族博物館設立準備室、元国立民族学博物館教授）

加藤真（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）

〔東北アジア研究センター〕

高倉浩樹センター長

千葉聡教授

瀬川昌久教授

寺山恭輔教授

理念・運営、研究活動の概要説明

○高倉センター長

東北アジア研究センターは約二十数年前に設立され、最初は10年間の時限も付いていたが、その後時限が撤廃されて現在に至っている。専門分野としては人文学、社会科学、理学、工学があり、基礎研究部門の文系に関しては歴史学、文化人類学、宗教学、言語学、あるいは環境政策論、政治学、環境経済学、また理系に関しては生態学、地質学、環境情報工学、土木などの分野が配置され、主にロシア、モンゴル、中国、韓国、そして日本を研究の対象にしている。

現在のところ、全部で23人の教員がいる。寄附部門もあり、また、文学研究科、教育学研究科、理学研究科、それから学内の附置研である災害科学国際研究所、東北大以外では協定を結んでいる東北歴史博物館から、兼務教員という形で活動に参加してもらっている。兼務教員、ポスドク、学振PD等を入れると、40人ほどになる。

人文社会科学の研究は言語により規定されるところが大きいので、ロシア・シベリア、中国など地域割りの分野になっている。例えばロシア・シベリア研究分野だとソ連史の寺山先生と文化人類学の私、それプラス経済史の塩谷先生という、3人で構成されている。それに対して理学と工学は、大学院との関係もあり、地域割りよりはディシプリン・ベースのほうが円滑に運営できる。したがって、生態学、地質学、あるいは工学などの幾つかの研究室に分かれて活動している。

ただし、それだけでは学際的な研究をすることが難しいので、3年から6年の時限付きの研究ユニットを設け、例えば歴史学と地質学がチームを組んで環境と資源に関連する研

究をするというような理念で活動している。「東北アジアにおける大気環境管理スキームの構築研究ユニット」、あるいは「東北アジアにおける地質連続性と『石』文化共通性に関する学際研究ユニット」など、さまざまな研究ユニットがある。

研究活動には多様な形があり、科研を取って一緒にやるもの、研究会中心に学生も含めて緩やかにやっているものもある。大きく分けると、三つの研究領域があり、環境と資源に関連する研究、歴史と文化を掘り下げていく研究、災害対応など応用的な側面を中心にして行う研究がある。

例えば「最新科学による遺跡調査ユニット」は、資源環境工学の先生が中心になって、考古学や地質学の先生をも巻き込みながら実施している。もともとは地雷探知の研究で、身に付けられるハンディな地雷探知装置を使ってカンボジアなどで調査する研究をやっていたのを、文化財の研究に応用すべく、いろいろな開発を行っている。メインはやはり装置の開発になるが、それを実際に使う上で考古学者とか地質学者との対話をしている研究だ。

それから、「災害人文学研究ユニット」は、私がやっているもので、元々、田畑先生あるいは佐々木先生と同じようにロシア・シベリアを対象とし、その文化人類学の研究を行ってきたが、東日本大震災の後、津波被災地の無形民俗文化財とか農業や漁業の調査をするようになり、そういう人類学的・民俗学的研究知見をどのように減災・防災政策に結び付けるかという観点で行っている研究である。

寄附部門は、上廣倫理財団という財団によるもので、同財団は東大や京大で幾つか寄附講座を持っている。その財団から寄付を頂いて歴史資料学の寄附部門というものをつくっている。これも実は震災に絡んだ活動だ。もともとは、退職された日本近世史の先生がおられて、震災が起きると、地域の有力な家の蔵に残っている文書が廃棄される傾向が強いを見て、廃棄される前に歴史資料としてデジタル化するとか、あるいは、被災した文書をレスキューするという活動を行っていた。その活動をさらに発展させるために、上廣財団から寄付を頂いて研究を行うグループができた。現在、准教授1人と助教2名の体制で運営されている。

今、ユニットとしては七つ運営されている。しばしば聞かれるのは、ユニットと共同研究の違いは何かということだが、ユニットは基本的に学内、あるいは学外の複数の研究分野と組んでチームをつくり、それにセンターから研究スペースを提供したり、あるいはポストクの雇用を支援したりする体制を取っている。研究組織をつくるのがユニットの役割だ。グループをつくってそれを母胎にしてさらに科研費を出してもらおうとか、共同研究を出してもらおうという形になっている。

それ以外に、客員教授と客員准教授もおり、常時2人の外国人研究員が雇用される体制になっている。外国での職位によって外国人研究員（客員教授）、（客員准教授）等の称号を付けて運用している。若手研究員としては、学術研究員が5名、それから学振の外国人研究員が2名いたが、今年度の9月までに全員就職していなくなったので、今はゼロに

なっている。それから、学振の特別研究員が 5 名。これも 4 月の時点では 5 名だったが、現在は 2 名残っている。それから、客員研究支援者が 1 人いる。以上のような体制である。

先ず、主要な外部資金のプロジェクトの中で、特に昨年度から今年度にかけて動いているものを紹介する形で、どのような研究が進んでいるのかお話ししたい。

一つは、人類史スケールの地域理解を進めることを目的としたもので、科研費・基盤 B の「現行型沈み込み帯出現の地質学的証拠」、「化石記録から種分化プロセスに迫る」などの研究だ。これは後述するように、学内の競争型資金・「知のフォーラム」を獲得して実施しているもので、先週まで「東北アジアの大陸地殻安定化と人類の環境適応」という国際シンポジウムを行っていた。

それから、大国統治と民族的多様性に関連する研究領域としては、科研費の基盤 B で東北アジアの辺境地域の民族多様性、スターリン統治下のソ連極東、オーラルヒストリーにおけるソ連等を対象とする研究が動いている。

越境する諸問題の共有に関しては、人間文化研究機構の北東アジア研究拠点化事業からお金を頂いて研究を進めている。また、文科省の補助事業として北極域の研究推進事業を実施しており、特に東北大学では、永久凍土の融解と地域社会の関係についての研究を進めている。これには SIP のからもお金を頂いている。

災害に関連しては、やはり人間文化研究機構の歴史文化資料ネットワーク事業に関わっており、今日、明日、明後日も、歴史文化資料保全を行うコーディネーター養成講座というものを実施している。これは、博物館や文化財行政に関わる専門家が 40 人ぐらい参加し、3 日間かけて、自然史から歴史、考古、民俗に関して、震災時にどういった対応をすべきかをテーマとした講座である。先ほど紹介した寄附部門の他、指定国立大学の中から東北大に災害科学研究拠点が設けられており、災害人文学の予算を使って活動している。

それから、共同研究は、東北アジア研究センターの教員と兼務教員の先生たちに呼び掛けて組織してもらっているものだ。共同研究には、年間 30 万ぐらいの予算を提供して、科研などのマッチング・ファンドで運用しやすい体制をつくってもらっている。

先ほど研究領域を三つほど挙げたが、それに関連して、特に人類史的タイムスケールによる地域理解としては、地質学の先生が、根室半島から歯舞のマグマがもたらす地域環境のシステムに関して、根室に見られる地形とアイヌのチャシの構築が関係しているという研究を行っている。それから、大国統治とか民族的多様性については、中国の政治学の専門家が、権威主義体制がなぜ中国において強靱性を持っているのかということを経済学的な観点から明らかにする研究を行っている。

越境する諸問題の共有ということに関しては、公募型共同研究も実施されている。外部の先生が東北アジア研究センターの教員とチームをつくって研究するのに対して、30 万程度の予算を提供している。建築学や都市工学の先生がセンターのモンゴルの歴史・文化の研究者と組んで、ウランバートルのゲル地区における住まいの複合的調査を通じた都市間

題の解決の提言をやっている。ゲル地区というのは、モンゴルの都市の近郊にゲルが不法占拠する形で形成され、そこで炊かれる石炭で二酸化炭素の増加とか、大気汚染に影響している。それに対応する政策提言をする研究が行われている。

東北アジア研究センターとして最近決めたのは、どんな地域研究センターとしての特徴をつくっていくのかという点である。私たちはロシア、モンゴル、中国、朝鮮半島、日本と幅広くカバーしており、しかも研究領域も広い。しかし、その割に研究者はそれほど多くないので、なかなか全体をカバーすることができないが、この三つの領域を設けることで、文系と理系がうまく相互作用する形ができていると思っている。一つは人類史的なタイムスケールによる地域理解。これはたぶん文系と理系と一緒にやってはじめてできることだと思っている。大国統治と民族的多様性は、どちらかというところと歴史学とか社会学とか文化人類学が中心になってやるテーマ。そして越境する諸問題の共有は、例えば気候変動とか大気汚染とか資源問題など、比較的自然科学と文系と一緒にやってやりやすい領域だろうと思われる。

この三つを柱にして東北大学独自の地域研究をつくれればよいと思っている。環境と文明の相互作用というところやや大きいかも知れないが、このような三つの領域をつくることで、あまり無理することなく研究してゆけるのではないかというのが、最近の考えである。

ここ最近の特筆すべき成果に関して、幾つかご紹介したい。一つは自然史に関連する研究で、人類史的なタイムスケールに基づく地域理解の提供につながる研究だ。ここに代表者の千葉先生もいらっしゃるが、東北アジアの生物相の進化ゲノミクスということで、貝とかカタツムリを中心にして、地域の生物相がどのように進化してきたのかについて新しい発見をしている。また、人間活動と生態系の関わりに関し、外来種が在来の生態系を壊滅していることを発見するなど、さまざまな研究活動が展開されている。

もう一つは、越境する諸問題の共有に関わる研究であり、実は本日の外部評価委員の田畑先生との共同研究なので、田畑先生も詳しくご存じのものだ。国際共同研究による北極・シベリア研究を行っており、地球温暖化による永久凍土への影響と地域社会への影響に関わる文理融合の国際共同研究だ。主に東北大からは文化人類学の専門家が出ており、他に三重大学にいる地理学の先生、名古屋大の水文学の先生などとチームをつかって、ロシア側の理学系・人文系の研究者と一緒にいる。MOUを結んで、国際共同研究として、ここ数年は国際会議や分科会を開催している。第2回アジア永久凍土学会、これは北大で、それから第5回国際北極研究シンポジウム、これは東京で行ったものだ。

それから、アイスランドで行われた Arctic Circle という国際会議に招聘されたり、大学院生が ArCS という北極域の研究プロジェクトに採択されて、1年間ロシアに留学して調査研究することもできた。また、ドイツのハンブルクからシベリアの永久凍土の人類学的な研究を行っている研究者を呼んだりもしている。そういう形で国際的な学術図書を出したり、国際共著論文を出すような活動が行われている。

そのほかに、大学間連携に関連するネットワーク型の地域研究体制というものもつくっている。これは人間文化研究機構の事業で、北東アジアに関わる研究として、民博が中心になり、北大のスラ研、島根県立大学、早稲田、東北大、富山大のグループで、経済開発、あるいは資源環境、政治学、思想・アイデンティティ、国際関係論等をテーマとして研究している。それぞれの研究者がそれぞれのテーマを持ち、共同研究をするような体制をつくっている。国内連携ができつつあると同時に、国際連携もこのような形で展開している。

ここ最近の成果としては、一つは、環境政策の専門家である明日香教授が学術図書を出している。それからもう一つは、やはり環境政策の石井先生が“*Transdisciplinary co-design of scientific research agendas*”という論文を書いて、*Sustainability Science* のベストペーパー賞を頂いたことが挙げられる。

さらに次世代研究支援として、東北アジア研究センターが参加する東北大の附置研・センター連携体の中で行われている若手への支援アンサンブル事業がある。例えば理学研究科と災害研とともに共同研究を企画したり、あるいは農学研究科と東北アジア研究センターでアフリカの土壌問題に関連する研究を行ったり、その他、災害に関連して福島県双葉町の研究を行ったりという、多様な研究が行われている。特に今年度は新たな地域研究の方法の創出を目指し、移動・流通・インフラに関する越境的研究を、センターの若手がロンドン大学の大学院生とともにいった。

また、ここ 10 年ほど既に続いていることとして、協定を結んでいるノボシビルスク大学の人文学部とワークショップを行っている。毎年、10 月には私たちがノボシビルスク大学に行って講義をし、2 月には学生と教員が来て、講義をしてもらい、学生には日本側の学生とともに英語で発表会をするという企画を実施している。それらを通じ、例えば文学研究科や国際文化研究科、環境科学研究科の院生も巻き込んで日ロ交流を行っている。

災害対応に関連しては、上廣歴史資料学部門が 1 期 5 年を経過し、29 年 4 月から 2 期の 5 年が再スタートした。活動量は非常に大きく、16 件の古文書の保全活動を行ったほか、宮城県内で、平成 29 年だけで 8 回の講演会と 7 回の古文書講座と 2 回の展示を行って、参加者も全部で 1000 人を超えるという、すさまじい活動を行っている。今は特に、人間文化機構の歴史文化資料のネットワークに中心的な役割を果たしている。

それから、指定国立の災害科学に関しては、災害研、理学、医学研究科との協力体制がある。この指定国立に入ったことで、助教の件費とか学術研究員を配置していただいた。また、東北歴史博物館から兼務教員を迎え、客員教授として、民俗芸能と地域健康、3D スキャナーの民俗学、映像アーカイブと震災記録、高精度解析による歴史文書・資料保全といった活動を現在行っている。それに関連する国際的な学術図書なども出ている状況だ。それからもう一つ、工学的なものに関しては、応用電磁工学による地滑りの評価なども行われている。

その他、2017年にセンターの千葉先生が『歌うカタツムリ』という本で毎日出版文化賞を受賞された。これは、カタツムリの研究史をひもとく形で生物の進化を分かりやすく書いた本で、私自身も読んで非常に勉強になった。

それから、さまざまな賞を頂いている。特に理系が中心ではあるが、Field-Weighted Citation Impactに関しては、地球惑星科学分野や生物学分野などにおいてインパクトのある研究者がいる。それから、平成28年度以降は地球科学および文化人類学の研究教員が、関連する分野の国際誌10誌、それから学術図書シリーズの2種などの編集委員会に関わって、国際的にも活動している。

最後に予算についてだが、外部資金に関連しては、科研は最近少し落ちてはいるものの、採択数が大体6割〜5割強ぐらいであり、外部資金の総額は、450万ぐらいなので、文系にしては大きいと思われる。これは、理系の先生がいることで母体となる金額が大きくなるためである。歴史資料学部門に関しても、別途寄付講座として寄付金を頂戴している。

センターの運営としては、ユニットに関連しては、教育研究支援者（現在の名称は学術研究員）としてポストクへ人件費を配分している。それから、研究資金の傾斜配分も少しだけ実施しており、研究スペースの優先的な提供、それから外部資金の申請のための資金支援なども行っている。

こうした活動を支えるためにコラボレーション・オフィスというものを設けて、事務組織とは別に、編集担当と企画担当のスタッフを2名入れている。それから、海外連携室には任期付きだが助教が1名いて、外国人の受け入れの際の、ビザ手続き等の担当を行っている。

それから、文系的な研究成果をより強調するために学術図書の刊行支援を行っており、2015年で13件、2016年で12件、2017年は7件、出版助成を行うことによってここ6〜7年で大体80冊の本を出している。

○瀬川教授 若干資料について補足させていただく。センターの組織に関しては、カラーの要覧に組織図があるので参照されたい。また、ホームページからとった資料には、現在勤務している職員の名簿、過去の教員、研究員、在籍した者の総覧ができるようになっている。センターの出版物については、一部の紹介を付してある。そして最後のページは、今年度の共同研究の一覧、プロジェクト研究ユニットの一覧が付いている。

質問と自由討論・Part1

○田畑委員（座長） では、今の説明についての質問を出してもらいたい。

最初に質問させてもらおうと、大変興味深く思ったのがこのユニットで、お金も含めどのように採択しているか質問したい。期間も3年から6年とばらつきがあるようだが。

○高倉センター長 現在は、毎年夏にユニットを公募し、10月ぐらいに認めるかどうかの判断をしている。実際に動きだすのは翌年度だが、学術研究員の雇用のための公募時間を考え、半年の準備期間を見込んだ上で翌年の4月から動く形にしている。

トップダウン的な形でユニットを決めるのが、最近の大学のガバナンスとしては好ましいとされるのかも知れないが、基本はボトムアップである。この制度もいろいろな形に変化してきた部分があり、当初は大きな外部資金を取った先生の支援をする組織として、特にスペースの支援などの形で、ユニットに近い支援措置がとられていた。その後、学際的な研究を進めるために、センター内、学内の研究者との連携を促進させるという目的で、ユニットを設置することになった。

本来的には中期計画とリンクさせて同時の期間で実施するのが理想だろうが、いったん個別に始めると、そろえることは難しい。最初は3年と5年という縛りもなく、何年でもよく、6年ぐらいをマックスにしていたが、それでは評価する際や戦略的に使う際に不都合なので、3年か6年に限定する形にしたのが現状である。

予算的には、先ほども紹介したように、学術研究員の雇用と、研究スペースを提供するという形での支援である。

○田畑委員 公募してそれを審査するのはセンター長と何人かで行うのか？

○高倉センター長 その通りだ。執行会議という、副センター長と総務委員でつくっている意思決定機関があり、その中で決めていくという形だ。制度的に言えば、予算的にはセンター長の裁量経費から全部出しているが、毎年どのくらい予算としてセンター長裁量経費が取れるのかが確定はしていないので、判断が少々難しい部分もある。現在、6名の学術研究員がいるが、特に上限を決めているわけではない。上限を設けるべきなのか、あるいは複数のユニットに1人の配置とするのか、制度的には模索中だ。

○田畑委員 ArCSで実施しているプロジェクトはユニットを形成していないのか？

○高倉センター長 していない。ただ、東北アジア地域の環境・資源に関する研究連携ユニットというのがあり、このユニットの中に実際は含み込んでいる形だ。細かく言えば、人間文化研究機構の北東アジア研究プロジェクトとArCSのプロジェクトに私は両方とも関わっているが、全員が双方に関わっている訳ではないので、あまり厳密に分けず、このユニット付の学術研究員が双方を支援していくという形で対応している。

○佐々木委員 1人の人が複数のユニットにまたがって所属するということはないのか？

○高倉センター長 基本的にはできる。ただ、代表が二つというのは、公平性の観点から難しいだろうと考えている。一番分かりやすいのは、中期計画期間に合わせて始め、6年間で終わりとし、中間評価で落とすなどの措置も考えられる。そうしたやり方だと、大学の評価でも「素晴らしい」と評価されるかも知れないが、研究者のモチベーションを上げるためには、あまりリジッドにやらないほうがいいとも考えている。

○田畑委員 逆に、どこのユニットにも入っていない人もいるわけか？

○高倉センター長 いる。そうした人には、自分で科研などをもって共同研究的なものを行ってくれればそれでよいという発想だ。もともと、ユニットを作ったのは、東北アジア研究のテーマの中には、文理連携とか学際的な共同研究に結びつきにくいものもあるが、組織としての活動をアピールするときに、そうした研究成果はあまり使えないことになるので、それをうまく統合していくための仕掛けとして発想されたものだった。そのあたりは、たぶん、設置したときのセンター長が瀬川先生だったので、一番詳しいと思われる。

○瀬川教授 今、高倉先生が言われたとおりだ。センターの組織図上の基礎研究部門というところに、全ての助教以上の教員は所属している形になっている。従って、ここで自分の専門の研究をやっているならば、一応研究者としては活動していることになるわけだが、この研究センターとしての機能をまっとうするためには、それだけではなくて分野横断的な学際的研究をする必要がある。そこで、このプロジェクト研究部門という部門を設けて、その中にユニットというものをつくり付けた。そのユニットは、3年とか6年の時限があって、その間はセンターの共有資源から学術研究員と場所を提供するので、それを基盤にして学際的な研究を行ってもらうという制度設計にした。

○加藤委員 資料6 ページ目に「東北アジアという地域理解の枠組みを確立し、普及させること」、これが理念として掲げられていて、どの部門もこの目的に沿って、本当に素晴らしい成果を上げていると思う。ただ、東北アジアという地域理解の枠組みが、必ずしもまだあまり十分普及していないのではないかなという気がする。7 ページに東北アジアと日本の直近の国々の図が描いてあるが、国家とは別に、東北アジアにどのような民族がどう分布しているなどの基本情報を示す図がここにもう一つあれば、この理念に到達するために進むべき道が見えてくるように思われる。

それからもう一つ、僕は自然生態学を研究しており、自然と人との関係に関心がある。特に東南アジアとかラオスとかマレーシアとかを中心に研究して来たが、東北アジアといったら、イメージとしては、昔、今西錦司先生が行った大興安嶺探検で中尾先生とか梅棹先生とかが行った研究のイメージが強烈だ。だから、東北アジアの人と自然との関係こそが、この理念を達成する上でも根幹にあるように思う。梅棹は「生態史観」という言葉を使った。別に生態史観を研究せよと言っているわけではないが、ある程度そういう大きな自然と人との流れというのを包括的に理解するシエマがここにあったら、すごくいいのではないかと思われる。

例えば、地図があって、農耕限界を描き、森林限界を描く。それだけで東北アジアの理解がすごく急速に進むと思われる。それは、農耕がない世界の自然と人との関係にも理解を広げることにつながるだろう。例えば、農業がない地域の言語がどうなっているか、生活の営みがどうなっているかとか、そういう理解が東北アジアを研究するなかでは強い立脚点になると思う。そういうところをアピールできるようにしたら、この枠組みをより確実に普及させることができるという気がする。

○高倉センター長 まだ紹介していなかったが、「東北アジアの大陸地殻安定化と人類の環境適応」というシンポジウムを1年かけて行ってきた。これには佐々木先生にも参加していただいている。地質学、考古学、人類学、宗教学にまたがる四つのシンポジウムから成り立っていて、クロノジカルには、大陸地殻安定化と生態系という視点で石器時代以前の話を、そして石器時代の話、民族史的な話をし、最終的には宗教観を議論するとともに、現在の災害の問題も扱うというシンポジウムだ。先週行われた議論は、今まさに加藤先生におっしゃっていただいたようなもので、特に、手前味噌になるが私が行った「北方的生業と社会」はそれに該当する。具体的に言うと、**Northern Modes of Foraging and Domestication** という形で、北方の農耕のないところの家畜化と狩猟・採集の景観がどのような人と動物との相互作用でできたのかというディスカッションをした。

これは、考古学の専門家、動物遺伝学、人類学者で議論したのだが、例えばドメスティケーションというものを考えると、どうしても、近東やモンゴル、中央アジアを中心にして、乳を中心としたドメスティケーションをわれわれは考えるが、トナカイとかタカとかワシとか、そういった動物の力や肉を利用していくドメスティケーションというものを、この東北アジアの一つの基盤として考えていくことができるのではないか。そして、日本の縄文時代はその南限的側面があるということなども、少し議論したところだ。

○加藤委員 植物のドメスティケーション、農業とは違った植物のドメスティケーションは何かあるか？

○高倉センター長 この議論の枠組みでいくと、植物のドメスティケーションは縄文時代のクリなど森林資源に関わるが、これをドメスティケーションというべきなのか、セミドメスティケーションというべきなのかはいろいろ議論があると思う。いずれにせよ、人間が何らかの形で保護的な介入をすることは行われていて、そのことには注目済みだ。ただ、このディスカッションは、どちらかという動物や魚の資源利用が念頭にあるものだと思う。

○加藤委員 ハスカップなどの果実類とか、こういう地域で特徴的な花とか、農業とは違うドメスティケーションというのも、さまざまな民族の多様な側面と関わってくると思う。

○高倉センター長 ご助言に感謝する。

○佐々木委員 最近、共同研究の実施時に注目されるのは研究倫理の問題だ。私が直接関わっている問題がアイヌの問題で、遺骨問題が相当議論をにぎわしている。東北アジアセンターとしては、研究資料の集め方とか、あるいは調査の入り方であるとか、調査で得られたデータの取り扱い方などに関して、ユニットの採否の際に何か一定の指針は策定されているか？

○高倉センター長 重い課題だと思うが、現状では、そういうものは策定していない。大学側としても、研究の倫理に関連する方針を立てるようという要望は来ており、佐々木

先生がおっしゃったように、研究不正が疑われたときの証明のために標本を残しておくとか、工学分野なら実験した装置をそのまま残しておくとか、配慮が求められてはいる。

人文系、特に人類学系で言えば、いわゆるフィールドノートの保存などもあるし、社会科学の質問紙の保存もそうだと思う。

現状から言うと、東北アジア研究センター全体として研究倫理に関わる取り決め等はなされていないのだが、大学内には文学研究科や医学研究科が作っているひな型があるので、それに準じる形で「それぞれの分野の研究倫理を守ろう」というところで止まっているのが現状だ。

○佐々木委員 実験装置の保存とか研究資料・データ等の保存というのは、研究の信用面にかかわるものだ。その他に、よくいわれているのは納税者に対する研究開示義務、社会への還元という倫理規定もあるし、それから、われわれ人類学の場合は、調査先の人たちとの間の関係に関するルールもある。そのようにきめ細かに規定しなければならないだろう。文理融合型の研究機関では、それぞれの分野によって倫理規定も違ってくるし、重視するところも違うから、大変だとは思う。だが、文理融合型の研究機関として「こういう形で倫理規定をやるのだ」という一つのモデルをつくると、最近では、学際的な研究機関とか研究チームも多く作られるようになってきているので、それらに対しても大きな指針になると思われる。

東北アジア研究センターは文理融合型の研究所としては非常に成功している部類だと思うので、その意味でもそういうものを作れば先進的な試みとして評価されると思う。

○高倉センター長 大きな課題だと思う。

○千葉教授 以前、倫理規定を検討したことがあって、やはり分野によって随分違っていた。例えば工学、理系、文系で、データ保全、データの取り方、論文にした後の倫理規定違反への対応のための証拠の保全などについて、一応大枠は決めたのだが、さきほども言われたように分野によって非常に大きく違っており、どういようにすり合わせるかで非常に悩んだ。

一応、当時作ったものがある。だから、実際の運用面ではまだ問題はあがあるが、一応の形としては作ってある。

○佐々木委員 アイヌの人骨問題は、複合的な倫理違反だが、あれを一つの他山の石として考えるべきだろう。

○高倉センター長 確かに佐々木先生がおっしゃったように、学際的な組織として、それぞれの分野の違いを踏まえてどう考えるべきかということは、われわれの間で話し合ってもいいのかもしれない。一言で言えば、お互いの在り方を尊重することを前提にしても、必ず守るべき一線は明らかにあって、それをどのように形にしていくかが重要であろう。

○佐々木委員 そうだ。ただ、「あれはあの分野の人たちの倫理だからわれわれは知らない」となることだけはやめるべきだと思う。

○瀬川教授 この問題をお互いに論じると、それによってそれぞれのディシプリンの中の垣根というものが揺さぶられて、相互理解を深めるいい機会になるかもしれない。

○加藤委員 生物の実験では、脊椎動物に対する倫理規定が大変強くなっていて、脊椎動物から遠くなるに従ってだんだん緩くなっていっている。貝などは少しまだ緩やかだが、脊椎動物でも両生類まではすごく厳しく、魚についてはかなり緩くなる。

○高倉センター長 先ほど言った研究の信頼性とは別なレベルの、調査対象コミュニティとの関係については、震災絡みの研究でかなりそれが明確に出ている。震災の問題に主に関わっているのは歴史学と文化人類と工学だが、いずれにしても被災地との関係、あるいは特に工学分野だと警察との関係が必ず出てくる。被害に遭われた方の遺体などに関わる話が出てくるので、そこは皆さん慎重に対応されているという印象を持っている。

○田畑委員 倫理関係、他に何かあるか？

○高倉センター長 逆に佐々木先生にお聞きしたいのだが、国立アイヌ民族博物館では、博物館としての倫理規定のようなものを全面的に出していくのか？

○佐々木委員 まだ誰もそこまで考える余裕はないが、やはり扱う対象の性格上、それはかなりはっきり出さないと、恐らくみんなが納得してくれないだろう。

○高倉センター長 人を扱う研究をしているので医学の倫理規定はかなり厳しい。例えば、質問紙やインタビューも倫理委員会を通さないと実施できない、というように。ただ、それでは、われわれ社会科学は何もできなくなる可能性もある。参与観察的な、例えばお祭りの現場で話を聞くなどのことも出来なくなる可能性がある。

その観点でいくと、医学はすごく厳しくはあるのだが、一方で遺骨などの研究標本としての価値付けの話になると、それが個人の尊厳に関わってくるという点に対して、彼らは逆に鈍くなる印象を私は持っている。アイヌ研究をめぐるのは、歴史学、文学、人類学などの人社系の研究と、医学系の方向を統合するような倫理規定ができれば、素晴らしいと思う。

○佐々木委員 今、人骨問題に関しては日本人類学会と考古学協会とアイヌ協会を入れて3学会が倫理委員会をつくっている。ただ、アイヌの場合はさらに、先住民族という観点が絡んできて、単なる人間の尊厳でなく歴史的な経緯がある人たちということで、さらに問題が複雑化している。

今のところ未だないが、われわれも、収蔵しているコレクションの、いわゆる返還問題（リパトリエーション）は、常に気にしている。これはどういう経緯で収集されてきたものかというのは常に気を払っている。ただ、われわれの博物館の大多数の収蔵品は、アイヌ民族博物館時代に収蔵されたものであり、アイヌ民族博物館はアイヌ自身が経営していた博物館だったので、「アイヌの人たちが自分たちで集めたものですよ」と言うことができる点では、問題は少し軽減されていると思う。

○田畑委員 では、別の話題に移りたい。

○加藤委員 地球温暖化の本を出されたということで、これは文理融合の大きな研究の成果だと思う。その中で、歴史学者との共同研究を通して東北アジアにおける気候変動の長期的な変化は見えてきたのか。そういうデータはあるのか？

○高倉センター長 それは、私自身のデータではないが、年輪気候学等の人たちが出してきたデータがあるので、例えばピンポイントにある地点のここ 100 年とか 200 年、あるいは数千年単位の降水量などといったデータは、ある程度は分かっているはずだ。

○加藤委員 あとは、例えばマウンダー小氷期がシベリアでどうだったかとか、そういうデータが歴史学から出てきたら、文理融合の大きな成果としてアピールできるかと思われる。

○高倉センター長 実は、この研究には歴史学者はほとんど入っておらず、私つまり文化人類学者がかかっているだけなのだが、発見というよりはむしろ今ある資料の再解釈による一つのブレイクスルーがある。永久凍土が卓越した生態系に人間が暮らすことについて、従来の文化人類学・考古学では、永久凍土がどんな役割を果たしてきたのかは、ほとんど視野に入っていなかったと思われる。ところが、この共同研究をやったのは、私が調査しているロシアのサハ共和国では、年間降水量 300 ミリ以下で、草地にしかないような条件であるにもかかわらず森林が生えるのは、永久凍土の持っている保水と蒸発散のバランス、特に夏の融解の水分供給が非常に大きな影響を与えていて、そこに人間が暮らしてきたのだという点である。

とすると、従来、文化人類では、生態系といっても、共時的に今の時点で森なのか、川なのかというところでしか理解せず、人がそこでどういう食料生産をやってきたのかということばかり議論してきたが、むしろ土壌とか物質循環に関わる視点を入れないと、人間の生態適応は実は説明できないことになる。これは、たぶん一つの新しい知見だと考えられる。

○加藤委員 それも大きな成果だと思うが、もう一つ、トナカイ遊牧がどの地域でいつごろできたかとか、森林が長いスケールでどう変化したかなど、さまざまな知見が得られて、それによって環境変動の長期的なパターンが見えてきたなどということがあったら、それこそがこの研究の文理融合の研究成果としてアピールできる気がする。

○高倉センター長 ありがとうございます。トナカイ遊牧等の議論は、最近、家畜遺伝学の分析が結構進んでいるようだ。まだ確定していない点もあるらしいが、従来は、例えばトナカイのドメスティケーションというのは、中央アジアの馬牧畜をやっている人たちの影響を受けて、人々がトナカイの牧畜を始めて、ツンドラに上がっていったのだろうと言われていた。だから、起源地は中央アジアや内陸アジアでそこから北上していったと言われていた。だが、はっきりしてきたのは、トナカイの家畜化がスカンジナビア半島で起きているものとシベリアで起きているものの 2 系統があり、一元的に説明してきた従来の議論は、たぶん破綻するということだ。ツンドラで独自にドメスティケーションしたという議論まであり、そうすると、いわゆる伝播論的な、南の中近東でできた農耕と牧畜が北上

していくという説明そのものが破綻する。しかし、それに反論するデータもたくさんあり、まだ分からないという状況だ。そこはとても面白い議論が今明らかになりつつあるという状況だ。

○加藤委員 ユーラシアの小麦と麦作農耕文化体系がエジプト、ギリシャ、ローマと伝わっていったという大きなスキームがあるので、アジア独自のドメスティケーションについてはまだあまり研究されていないと思う。アジアで唯一、東北アジアでドメスティケートされた植物はヒエだが、ヒエが日本で生まれた可能性も残っている。ヒエがどこでいつごろ生まれたのかなどはすごく面白い問題だと思っている。

○高倉センター長 面白い。ヒエは、全然念頭になかった。

○加藤委員 アワ、キビは中央アジア原産だが、ヒエだけは東北アジア原産だ。

○高倉センター長 具体的に言うと、中国の東北部などが原産だろうか？

○加藤委員 日本が原産の可能性もあって、イヌビエという野生種があるということと、渡島半島の遺跡の研究で、深いところから浅いところに行くに従って粒径が大きくなっていくというきれいなデータが出ているので、日本もドメスティケートの一つのセンターだった可能性がある。

○高倉センター長 新しい共同研究のテーマが出てきたという感がある。

○加藤委員 東北アジアの農業というのもひとつのテーマであろう。ここの共同研究の中に農学の研究者があまり入っていないので、それはこれから目指すべき一つの方角になるという気もする。

○高倉センター長 確かに、今まで私自身交流があるのはどちらかというと畜産、漁業の研究者で、農業は比較的疎遠だった。

○佐々木委員 加藤先生のお話で気になったのは、東北アジアの農業と関係して、結構いろいろな文化要素の分布において、東北アジアがミッシングリンクになってしまっているケースが多いということだ。最近、私は繊維と機織りの技術の分布を確認しようとしているのだが、どうも東北アジアのところは抜けている。

アイヌに、実は機織り機があって、自前の繊維を使った機織り文化があった。もう一つ、シベリアでは西ブリヤートにある。使っている繊維は全く違うが、機（はた）がよく似ている。何でこれほど似た機があるのに中間地域にないのかと思うのだが、全然研究がなされていない。朝鮮半島から、今の満州からロシアの極東ぐらいの地域が完全に空白で、情報がないという状態だ。機織りの分布を見ると、シベリアの南縁に張り付いた形になっている。

○加藤委員 ニレとオヒョウの樹皮を使うというのはどの辺まで広がっているのだろうか。

○佐々木委員 樹皮衣は北海道だけだ。樺太にも少しあるが、樺太ではイラクサのほうが主流だ。イラクサ繊維は結構広く分布しているが、イラクサ繊維を織るという発想がアイヌにしかない。ブリヤートに行くと馬の毛になってしまうが、これも馬の毛を織るという

発想が西ブリヤートと、ハンティとマンシにもあるが、実はイラクサを織る技術と共通している。

ある工学者の話だと、機織り技術は「農耕と関係するのではないか」と言われるが、その点、東北アジアは完全にミッシング地帯になっている。

○加藤委員 その技術の伝播が、南からの可能性もある。

○佐々木委員 ある。中国方面からそれぞれ渡っている可能性もある。（アイヌとブリヤートが）直接接触する機会というのはまずないので。だから、東北アジアの空白地帯が埋まれば、かなりその辺が明らかになるかと思われる。

○高倉センター長 ありがとうございます。東北アジアの農業の起源と機織も、また新しいテーマだ。しかも、これも文理融合でやるべきテーマだろう。

○田畑委員 ここのセンターの一つの特徴は、どうしても文理融合というところにある。他に地域研究センターは日本にたくさんあるが、文理融合なのは東南アジア研などだ。

○高倉センター長 東南アジア研には農学部と医学部、熱帯学の人たちがおり、歴史学と例えば生態学や農学がうまく結び付いた研究を行っておられるという印象を持っている。

○加藤委員 大興安嶺探検で今西錦司先生に中尾佐助先生が同行したことに大きな意味がある。そこに梅棹忠夫先生がいて、特に梅棹と中尾との両者の関係が多様な発想を広げていったのだと思われる。

○高倉センター長 確かにそうだと思う。私たちが、特に人類史に関わるような研究をするようになったのは、実は比較的新しいことだ。個人的には、私は文化人類学者だが、隣にいる瀬川先生は同じ文化人類学でも全然違う方向だ。私のような関心を持っている文化人類学者は、人類学者としては少ないと思う。

だから、先ほども紹介した文学研究科の考古学研究室との交流もあって、さらに理学系、生物学系ともうまくつながれるのだと思っている。しかもそれは嫌々ながらの文理融合ではなく、組織論的な理由での融合ではなく、自分の研究として実践できると感じて、それを進めているところだ。ただ、もう一つのセンターの柱というのは、歴史学と言語学を含めて現在の社会がどのようになっているかという研究だ。それに関しては研究資料の素材としてあまりにもいろいろなものがありすぎて、そこに理科系的なものを入れても、あまりうまく解釈ができない傾向がある。人類学や考古学は資料となる素材が少ないので、理科系的なデータも入れるといろいろな解釈ができる側面を持っていると思う。

おそらく、寺山先生や瀬川先生がやられているような研究は、性格が違おうだろうと思う。むしろ、中国と日本を比較したり、中国とロシアを比較したりなどという形のほうが、センターとしての特質を出せるのではないのかと思ってる。実際に、寺山先生と上野先生が行っておられるユニットの研究は、ソ連史と中国史を総合化するような試みをされている。

○寺山教授 普通はロシア史だとロシアをやっている先生が集まって研究するということが多いかと思うが、上野先生が中国史をやられていて、同じ時代に2人とも関心を持つ

ているということもあって、企画した。私も出身が京都大の現代史というところで、現代史をやるならばどこでもいいということだった。日本史から、アメリカ史、ヨーロッパ史、中国、朝鮮等、さまざまな地域を対象とする研究者が集まっているところを出たので、そのあたりはあまり抵抗なかった。ちょうど上野先生の場合は30年代、40年代の中国の辺境地域の民族問題に関心を持っていて、私もどちらかというロシアの中心よりはロシア・ソ連の辺境地域に関心を持っていたので、そこら辺がうまくかみ合って、話が通じるところも結構多くある。

だから、今もモンゴルとか新疆とか、満州／東北地域とソ連の極東地域の関係などについて、いろいろお互い教え合うところも多いので、その点ではこのセンターという珍しい場所を有効に活用できていると感じている。

○田畑委員 文系の地域研究だと、そのような地域横断的な研究は最近の傾向であり、スラ研も中国やインドなどにまたがる研究を行おうとしている。だが、うちがやろうとすると他の研究機関を巻き込まないといけないが、ここは内部でできるということが違う点だと思った。

○高倉センター長 ぜひこれを機会に一緒にスラ研ともやって行きたい。

○田畑委員 文理融合の話に戻ると、北極域研究でも、私はArCSの文系の代表をやっているが、本当の意味での文理融合、文理連携が進んでいる例は二つ三つしかない。高倉先生のやっているところが一番しっかりしていて、成果も出ており、周りからも評価されている。

それがこの組織のせいなのか、高倉先生の個人的な力なのか分からないが、このセンターの特徴なのではないかと思う。

○加藤委員 以前行われた白頭山の研究も文理融合の一例だったということだが、これから白頭山とかカムチャッカなど、火山の歴史の研究は、日本にとっても非常に重要な研究になると思う。

○瀬川教授 白頭山の研究に関して言えば、なかなか政治的に難しい地域が対象だったので、十分展開できなかったという部分もあるが、うちのセンターの中での文理融合の一つの試行錯誤の一過程だったと思う。

地質の研究者からは、中国史や朝鮮史の中で文書に関連する資料がないか調べてくれというリクエストがあり、いろいろ整合させようとしたが、都合のいい資料は少なく、なかなかうまくいかなかったようだ。だが、いかに文理融合というものが難しいかということを確認する意味では、非常に意義があったと思う。

○高倉センター長 それに関しては、例えば地質学の先生が中国史の文書で何か兆しがないか調べてくれと言われても、歴史学の先生にはそういう発想で文書を読む発想がなく、共通の課題を見つけるのが難しかったのだろうと思う。

○瀬川教授 先ほど加藤先生が言われた、気候変動に関する記述が歴史文書の中にあるか探す研究は中国の歴史研究の中にある。地方志の中から抜き出そうと思えばできないことは

ないのかもしれないが、それは砂浜の中でダイヤモンドを探すような作業だ。最近も千葉先生から「タニシに関する使える資料がないか」ということを聞かれて探しはじめたが、どうやって探せばいいのか途方に暮れてしまった。普段見ている角度が違うので、同じ資料を目の前にしてもどう掘り下げていったらいいのか糸口が見えないということはある。

○佐々木委員 今なら漢文の資料をみんなデジタル化して読み込んで検索すればよいのでは。

○瀬川教授 代表的な資料はそうになっているが、われわれが見ているようなものは、むしろもう少し地場の資料で、そこはデジタル化されていない。

○佐々木委員 中国ではそのあたり、もうかなり進んでいるということはない？

○瀬川教授 やろうとはしている。ただ、なかなか具体的に利用するところまでは追いついていない。

○高倉センター長 それに関連して、今は災害研に移った歴史学の先生の発表を聞くと、慶長大津波のことなど災害史を細かく分析することで一つの業績になるということで、研究として面白いと感じた。

○加藤委員 日本では、飢饉の記録とマウンダー小氷期がどれだけ一致するかという研究がある。

〔休憩〕

○田畑委員 このセンターは、共同利用共同研究拠点に入っていない。申請もされていない。その方針は変わらない？

○高倉センター長 ご存じと思うが、2回出して、2回落ちている。国際共共拠点に関連してもいろいろ調べたが、国際共共拠点は無理だろうと判断し、申請していない。

共共拠点に関しては概算要求マターになるので、組織を安定させるという意味においても大きな柱になることは理解しているが、現状では文科省はあまり増やさない方針と思われる、あえて勝負しなくてもいいのではないかと判断した。どれだけの費用対効果があるのかが見えにくいという点が大きい。

逆に田畑先生にお聞きしたいが、今後は予算が拡充されていく可能性はあるのだろうか。

○田畑委員 1100万とか1600万とかのお金が付いたが、お金が付くと公募研究をやらなければならなくなる。また運営委員会を年に2回ぐらい開いているいろいろな人の意見を聞く機会が出来るなど、それなりにメリットもあると思う。ただ、いろいろ努力した割にはよい評価がもらえないこともある。はっきりは分からないが、文科省がどんどん拡充してゆこうとしているようには思えない。

○高倉センター長 むしろ私が着目したのは、北極域事業絡みで、北大の北極域研究センターが極地研と JAMSTEC と組んで連携組織を作った。あのようなものができるのであれば参加してもよいかと、個人的には思う。

○田畑委員 しかし、あれは全く ArCS の受け皿づくりという特殊な状況でつくられたものだから、あのようなものはなかなか他にはできないかも知れない。

○高倉センター長 国立アイヌ博物館と何か一緒にできないかななども思ったりしたのだが。

○佐々木委員 それは、言うていただければ、私たちには非常にありがたい話ではある。

○高倉センター長 あともう一つは、私たちのセンターの学内での位置付けが、附置研のカテゴリーに入っていないという点がある。附置研・センターと称しているのは、あくまで自称だ。組織上は附置研としては扱われていない。

先ほども紹介したが、附置研・センター連携体というものがあるが、それは学内的に保証されている組織ではなく、あくまでグループ内の自称だ。附置研と、私たちのセンターと、電子光物理学研究センターという共共拠点、材料科学高等研究所という WPI 関係の組織、そして学際フロンティア研究所という研究大学強化促進事業でできた組織、それらが混在したグループだ。ただ、学内的には、私たちはあくまで学内教育研究施設なのだ。

われわれとしては共共拠点のことがあるので、微々たるお金だが公募共同研究も実施して、学外の研究者とつながろうと模索してはいる。しかし、組織的に学内共同利用施設なのだから、学内の研究者ともっと連携する仕組みをつくったほうがよいのではないかというのが、この 2 年間ぐらい感じていることだ。

ただそうはいつでも、理学研究科、環境科学研究科、文学研究科、教育学研究科などとはそれなりに連携できているのだが、法とか経済はなかなか敷居が高く、連携できていない。私たちのセンターには、環境政策の研究者を除けば、政治学とか経済学者などハードな社会学者がほとんどいないので、連携ができればよいのだが。しかし、経済学部でも中国経済をやっている人はいるが、ロシア経済の専門家はおらず、政治でも、中国政治やハンガリー政治史の研究者はいるものの、連携できる専門家が少ないというのが現状だ。

ただ、本部に対しては、「私たちは学内施設なので学内連携をがっちりやっている」と言えたほうが有利であろうとは考えている。

あと、共共拠点に申請して落ちるリスクを考えるのであれば、人間文化研究機構の連携事業のように金額的にはあまり大きくないが外部と MOU を結んで行うような形の連携を積極的にやったほうがよいのではないかという意識もある。

それでも、部局評価に際しては、中規模予算はうまく獲得しているが、大規模なものは取っていないと指摘されることは確かだ。

○田畑委員 他に何か、どなたでも。

○加藤委員 では、研究活動について。東北アジアの大陸部と島嶼部の人の行き来とか、交易とか、文化の移動とか、そういうこともこれまでいろいろやってこられたと思うが、自然のほうでそういうことをどうこれから展開していくのかという点に大変興味がある。千葉先生が陸貝と淡水貝でそういう生物の交流のようなものを描いていて、それは本当に重要な仕事だと感じた。

一方で、日本の生物多様性の起源とかというと、ほとんど東アジアとか東南アジアとか、あとヒマラヤなどが多い。本当に東北アジアでそういう生物の交流を考えるとしたら、一番成果が上がるのは、寒いところ、高山にいるものだと思う。そのような、東北アジアとの交流で大きな成果が出る可能性がある高山の植物とか高山の生物とかについてこれから取り組む予定はあるだろうか。

○千葉教授 今、植物保全の牧先生、農学部の陶山先生の2人とは共同研究を進めている。特に牧先生は高山植物、北方系の植物にこれまでも多くの研究を進めてこられている方だ。また、植物を含め、いろいろな分類群で高山、北方系、さらにその遺存種として北方系の生物がどのように日本の高山に取り残されてきたのか、といったことを含めた研究は今も進めているし、今後もさらにそれを進めていこうと考えている。

ただ、それを文化的な部分とどのように結び付けていくかは課題で、それはいろいろ考えないといけないところだと思う。例えば、比較的新しい時代に北方の人々との交流の過程でそれがどう影響してきたのかということも今後併せて研究していこうというビジョンは持っている。

○加藤委員 人とは別に、生物のいろいろな交流の歴史というテーマは、東北アジア研究の一つの大きなテーマにこれからなり得ると思う。

○高倉センター長 先ほどのヒエの話といい、これは私にとっても新しい視点だ。東北アジアで人と植物の関係を考えるというのは、起源的にも、あるいは歴史的な変遷としても、現在の話としても、面白いと思う。佐々木先生が先ほど言われた繊維の話なども絡むと思うが、そうした研究は世界的にほとんどなされていない。

○佐々木委員 すぐ農耕の話になってしまう。恐らく縄文時代もそうだと思うが、人が住んでいた跡には、植物相にも特徴が出てくるようだ。今は無人になっているところでも、木をよく見るとここは集落があった場所だと分かたりする。私はアムール川地域でしか研究していないが、大体、目星がつく。それは別に意図的にドメスティケーションしているわけではないのだが、普段使っているうちに、食べかすの種がまた生えてきたりという形で、村があった周りに、特徴的な利用可能植物が結構見られる。

また、これも全然ドメスティケーションではないが、なぜかアムール川流域では、竪穴住居の残っているところには必ず近くにナラ林がある。アムール川の支流でも本流でも、ずっと船で旅をしていて、ナラ林が見える場所に上陸してみると、多くの場合、竪穴住居が見られる。そういう面白い関係があるように思われる。昔、佐々木高明先生が「ナラ林

文化」と言い出して、荒唐無稽な話だと思っていたのだが、実際に行ってみたら本当にナラ林の中に堅穴住居があるケースが多い。

そのことを気にして北海道へ行ってみたら、北海道もそうであった。北海道はナラの樹種が違ってミズナラになり、大陸側はモンゴリナラといってまた別の種類だが、北海道でもナラの林のところに堅穴住居がある。

それは本州の東北地方でも通用するかと思って尋ねてみたが、本州の場合は森が相当開発されてしまって、河岸段丘でナラ林が生えているところは、本州以南の場合はみな水田に開発されてしまっているのだから、分からない。

○加藤委員 それはドングリを利用していたということか？

○佐々木委員 ドングリの利用もあるし、恐らくモンゴリナラなどは生えるところは水辺に近いが洪水になっても水をかぶらない。だから、堅穴住居を置くにはちょうどいいという条件があるのかと思う。木の特徴としては、ドングリを利用もできるし、ナラは薪（まき）にしてもいい。いろいろな条件がそろっている。

○加藤委員 人が住み始めて、人の周りの環境に適応した生物は非常に多く、雑草などもそうだ。それらを見ていくと面白い。スズメなどもそうだと思う。

○高倉センター長 確かに、こういう共同研究を実施すべきだ。

○千葉教授 それはもうやっている。今、牧先生と行っている研究は、ちょうど縄文から弥生にかけてどのように植物相が変化し、かつそれに合わせて、例えばそれを利用する昆虫がどのように餌をシフトしていったかについての研究だ。ナラではないが、例えばクヌギ。これは牧先生たちの研究だが、クヌギはほぼ全て外来生物、つまり帰化種で、一部は九州にもともと土着していたと言われてはいるが、ほとんど韓国・九州から、弥生以降に人間が植林して広がっていったということが分かっている。

だから、そういう意味で、日本の植生というのは、縄文以降、急激に、劇的に変化したのだろう。それは文化と生物相の相互作用のいい例になっていて、それが逆に人間の文化にもどう波及していったのか。それらの植物を人間が利用しているので、どのように人間の文化にそれが波及したのかという相互作用を考える上で、非常にいいテーマだと思う。

○高倉センター長 少なくとも、民俗学の中では個別の事例としてたくさん情報が集められているが、自然史に絡めて再解釈する議論はない。

○佐々木委員 確かにそうだ。

○高倉センター長 シベリアでも、みんなどうしても動物ばかり見ている、最近やっと魚を見るようになったという程度だ。だから、今の話を聞いていて、植物利用のことをやって、自然史と絡めた研究ができれば面白いなと思った。一方で、瀬川先生にお聞きしたいのは、中国のほうでもそういう植物利用の民俗に関する研究というのは沢山あるのではないかと。

○瀬川教授 私の知識では全部網羅しているわけではないが、たくさんあると思う。今の話の中でも出てきたが、うちのセンターの文理連携、文理融合も、いろんな試行錯誤があ

った。一つは、地球史あるいは自然史をベースとして人間が関わる歴史につなげてゆく、そういう研究に収れんしてきていると思われる。今の話の中でも、そういうテーマで一つの筋書きができる。だから、それは一つ重要な方向性なのかなと思う。だが、一方では現代的な問題として、国際関係や経済関係など現代的な東北アジア地域の国際関係の問題と、それら自然史ベースの研究との間でどう釣り合いを取っていくのか、あるいは、どちらかにシフトして、中心をひとつに決めていくのか、そういうことはどこかで考えてもいいのではないかという印象をもっている。

○加藤委員 ユーラシア大陸の西側にはたくさんの国があって、東側には国が少ない。それはやはり、農耕が西側では早い段階から北上したのだが、東側ではあまり上がらなかった点大きいと思う。シベリアにはたくさんの民族がいたのにもかかわらず、結局全部スラブ系に支配されてしまったということは、農業がなかったということが一つ大きく関係していると思うが、そういう過程が、自然と人と両方を見て行けば、大きな絵が描けるのではないかという気がする。

○高倉センター長 少し視点が違うが、中国とかロシアが、なぜいわゆる帝國的な、あるいは非常に権威主義的な国家体制を維持できているのかについて、政治学とか歴史学の人に研究してもらったら面白いかと思っている。

○佐々木委員 人類学者の視点から疑問に思っているのが、アイヌにしてもナナイにしても、極東の少数民族が何で少数民族になってしまうのかという点だ。彼らはその前の封建的な体制の中では特権階級だった。それが近代国家の中で少数民族化していく。そして何でその体制が今まで続いているのか。ただ近代国家の支配だけでは説明がつかない。そのあたりは、政治学者ではないので分析したことはないが。

○高倉センター長 先ほどの瀬川先生の話に関連して言えば、この文理融合的な要素というのは、一つのセンターの柱であると思うが、それに全部収れんするのはたぶんあり得ない。やはり、言語、歴史、社会、文化の研究がないと、地球研の自然版、アジア版に過ぎなくなってしまうので、そうはならないほうがいいと私は考える。

○加藤委員 プロジェクト研究の中で一つくらい、そういうものがあってもいいのではなからうか。東北アジアの大きな理念の普及ということを実現させるためには。

○高倉センター長 そう思う。

○田畑委員 われわれもいつも悩んでいることだが、大型の科研費などもあまり応募がないということだが、事前に所内で相談などはしているのか。

○高倉センター長 やっていない。だから、スラ研が行っていると聞いて「すごいな」と思った。

○田畑委員 われわれも、実質的にできているかどうかは分からない。ただ、今期中期計画にも、大型の研究を取りにいくと書いてしまっているものだから、せめてSぐらいは取りたいと考えているのだが、今のところ失敗している。過去には二ついっぺんに取った

バブルのときが一回あったが、その後はもう取れていない。ただ、基盤 A は継続的に取るようにしている。

○高倉センター長 私たちは、B 止まりの年もある。

○瀬川教授 磯部先生の大型科研があった。

○高倉センター長 そう。特定領域を取っていた時代もあった。でも、スラ研は外から見ると、所全体で大型の S や特定領域を獲得し続けているという印象を持っている。それに比べると、私たちのところは、S にしても特定領域にしても、個々の先生の研究で、あまり全体には広がらなかった感じがする。だから、それは少しもったいなかったと思っている。

○田畑委員 われわれは、21 世紀 COE、新学術領域、グローバル COE など、一応、所内で相談して、かなり計画的に体制を整えて取りにいった。しかし、その後、それが続いている。

○高倉センター長 いや、そうは見えない。でも、逆にお聞きしたいのだが、そういう会議はどのように人を集めてやるのか？センター長が何か応募のためのワーキンググループをつくらせるのか？

○田畑委員 いや、われわれはこちらの半分ぐらいのサイズしかないから、ほとんど毎週のように所内の会議、教員会議と称するものがあり、今は 8 人ぐらいの規模でやっているが、大体そこでそういうことがらについても話し合いをしてきた。

○高倉センター長 なるほど。それは教授会とは別に行っている？

○田畑委員 教授会はない。教員会議と称しているインフォーマルな会議だ。先ほど出た外国人研究員の採用の決定など、ほとんどすべてそこでやっている。要するに、10 人ぐらいしかいないから、それだけでやっている。

○高倉センター長 私たちの場合は、教授会というものはないが、運営会議と全体会議というものを一月に 1 回開催している。全体会議は、有給のポスドクを含めて雇用関係にある人は全部出してもらうという会議で、そこでは部局長連絡会議等の情報を全部流す。運営会議のほうは、准教授以上だけが出席し、人事や予算の審議はそこでやっている。そこが実質的な意味での教授会となる。そのほか、1 カ月に 1 回、副センター長と総務委員の 5 人で集まるのは、センター会議の準備をするためのものだ。だから、密に会って話し合っているという感じはあまりない。

○佐々木委員 全体会議は全体で 40 人ぐらいか。

○高倉センター長 全体会議には図書室の司書なども全部参加するので、もう少し多くなると思う。要するに、現状ではこういう動きがあるから、今後これこれの業務が生じる可能性があるのでよろしく、ということを伝えている。

○佐々木委員 運営会議のほうは？

○高倉センター長 運営会議は 15 人程度だ。寄附部門の教員などは陪席はしてもらっているが入っていない。

○田畑委員 また違う話題だが、うちのセンターも外部評価のときにかなり厳しく言われたのは、ジェンダーの問題だった。ここでも、やはりそこは指摘されているか？

○高倉センター長 されている。全学でもワーストに近い。後ろから数えて2位あたり。

○田畑委員 うちも、特任も入れて助教が7人もいるが、そのうち5人までが女性なので、短期的には救われている。だが、助教はみな任期のある人たちなので、任期のない教授、准教授には1人もおらず、喫緊の課題になっている。

○高倉センター長 同様だ。実は、去年の4月に、日本・朝鮮半島研究分野にデレーニ・アリーンさんというアメリカ国籍の女性の研究者を採用した。これは、大学が女性を増やすための措置として、新規の教員で任期なしなら5年間は人件費を面倒見るという制度を設け、公募が出たので応募して採択されたものだ。

このときだけは女性限定の公募を行ったが、公募を女性限定としたら応募者が出なくなる恐れもあり、なかなか難しい。女性を増やしたほうが文科省の数値目標にも寄与するのは分かっているが、難しいのが現実だ。

○田畑委員 今言われた准教授の方は、任期なしなのか。

○高倉センター長 任期なしだ。

○田畑委員 日本語もできるのか。

○高倉センター長 日本語はできる。たぶん会われていると思う。デンマークの大学にいた人だが、去年の1月のグリーンランドでのシンポジウムの際に、漁業について発表していた。

女性はどうやって採用すべきなのだろうか。

○佐々木委員 教員公募をすると女性ほどの程度応募があるのか。

○高倉センター長 直近実施した日本史の公募では、25%ぐらいだったか。

○瀬川教授？ 25%、といっても母数が少ない。

○高倉センター長 そう、母数はあまり多くない。サンプルとして挙げられるほど、人事が活性化していないので。もう1人、任期付きだが研究支援部門にいる助教の内藤さんという方は公募で採用した。これは国際交流の担当という形だが、このときは女性の応募者が比較的多かった。でも、他の、普通の専門を公募すると、やはり女性の応募は大きく減るという印象だ。教員の中にも、「女性優先の公募はすべきでない」という意見を持っている教員もいるので、なかなか難しい。どうしたらいいのだろうか。

○佐々木委員 別に東北大学のイメージというわけではない？

○高倉センター長 東北大は、旧帝大の中で教員女性比率の成績が一番悪い。特に工学部の教員が多く、工学はほとんど女性がいないので、それに関しては成績が悪くてもあまりいじめられないのではないかと印象が少しある。

○田畑委員 他に何かあるか。

○加藤委員 教育に関して質問。学生定員がないということだが、全学共通科目で授業を出している。その中に「東北アジア」という言葉が入っている授業は何かあるか。

○高倉センター長 共通科目で、今、2年に1回、東北アジア研究に関するイントロダクション的な科目がある。教員がオムニバスで出て行って歴史から自然から多様なテーマで講義する科目がある。

○加藤委員 そういうものがあるとよい。

○高倉センター長 あとは、全学教育に関連しては、中国語、ロシア語、それからモンゴル語の全学教育の科目を提供している。また歴史学とか、文化人類学とか、あと、自然自然科学系の科目もいくつか担当している。

○加藤委員 そういう「東北アジア」という言葉が入った全学共通の授業があったら、ゆくゆくはセンターの発展にもすごく重要な役割を果たしてくるのではないかと思う。

○高倉センター長 はい。

○田畑委員 全学教育というのは、1年生などの受講する科目か。

○高倉センター長 そうだ。

○田畑委員 3、4年生向けにはやっていないわけか。

○高倉センター長 3、4年生向けには、理学系とか工学系は実質的に担当しているが、文系は非常勤で担当することはあるものの、制度化されたものははない。だから、そこが大学院生を確保するときの難しさでもあって、学部の卒論に関わっていないので、なかなか院生を確保するのが大変だという印象はある。

○瀬川教授 それはできたときの経緯によっている。センターができたときに、主に大きく分けて文系の教員というのは旧教養部系の出身者で、学部教育にもともと関わっていなかった教員が入った。他方、理学部、工学部からはもともと学部を持っていた学部の先生たちの一部が配属された。そういう歴史的な経緯からそのように分かれた。

○田畑委員 それはうちも全く同じだ。うちも3、4年生向けには何もやっていないから、北大内部から大学院に来るといった者はほとんどいない。でも、学部教育まで手を出すことはとてもできない。でも、高倉さんのところには時々入ってくるではないか。

○高倉センター長 いや、最近だけだ。大学院の分野の名前から「文化人類学」を外した途端に院生が増えたという、すごくショッキングな話だ。私たちは協力講座で環境科学研究科というところで大学院教育をしているのだが、前は瀬川先生と同じ分野をつくっていたのを、教授ごとに別にしようということで分野を分けた際に「文化人類学」を外してみた。そうしたら、突然増えた。少し不思議な、悲しい現象だ。

それも、先ほどの全学教育の東北アジアという名前の授業と関係していると思うが、大学院も結局、文学研究科に関わっている先生と、それから、理学部と生命科学と環境科学、情報科学と、みなばらばらに所属している。その中では、環境科学の文系が比較的多くて、そこでは講座名を東北アジア地域社会論など、「東北アジア」を冠している。だが印象としては、そもそも環境科学研究科に関心がある学生で地域研究をやりたいと思う人はなかなかいないのではないかと思う。

○加藤委員 特に全国的にフィールドに出るような学生がすごく減っている状況の中で、そういう学生をいかに育てるのかというのが急務だ。

○高倉センター長 確かにそう思う。

○佐々木委員 出版物もたくさん出されているが、社会貢献も随分積極的にされているようなイメージがある。例えばセミナーとか講演会などでは、どの程度人が集まるのか。

○高倉センター長 私たちのところは、公開講演などをシステムチックに開催していて、かなり成功しているほうだと思う。

先日、23日に公開講演会をやったときは191名という参加者がいたが、多分今までで一番入った数だと思う。先ほども言ったコラボレーション・オフィスという担当部署があって、そこがロジを基本的に全部やってくれる。また、東北アジア学術交流懇話会という友の会のような組織がある。年間で会費を1000円取って、出版物の一部を年に1回ぐらい贈呈するという形にしている。その会員は100名弱いて、それらと過去の来場者に声を掛けると、最低でも50人は集まる。テーマによっては、普通に70~80人は来場者があると思う。

先ほど触れた上廣歴史資料学部門のほうは地域史、それも伊達藩の歴史などを中心しているものなので、これはものすごい集客力があり、参加料を取って講座をやるぐらいになっている。今、古文書を教えるための講座を有料化していて、それでも200人の定員がすぐ埋まるようだ。やはり日本近世史の社会への根付き方というのはすごいとつくづく感じている。

○佐々木委員 やはり仙台の歴史とか、地元根差したテーマか。

○高倉センター長 そうだ。歴史資料学部門は、従来の国家史中心の文書ではなくて、まだ知られていない文書の発掘をやっているところだ。だから、その発掘した文書を地元の人に読ませるように教育して、いわゆる郷土史を研究できる高齢者を育てている部分もある。そこについてはいろいろ議論があり、「もう少しシステムチックに学位や資格を与えてもいいのでは」という意見がある一方で、「いや、純粹に好奇心でやっているのだから、制度化はしないほうがいい」という意見もある。いずれにせよ、大きな特色だと思う。

ただ、あえて言うと、日本史の特殊性があって、日本史の人はなかなか他の分野と接点を持ちづらく文理融合以前に異分野融合がなかなか難しいところがある。彼らの社会貢献がうまくいくにつれて、その関心が中国とかロシアとかモンゴルにつながって行けばよいのだが、なかなかそうなっていないというのが正直なところだ。

○佐々木委員 一定の学習効果はあるのか？

○高倉センター長 ある。少なくとも古文書の会はもう再生産し始めており、そこで習った人が文書を読めるようになって、新しく古文書の会をやるときのTAの役割を果たしていたりする。だから、そういう効果は非常にあり、実際に文学研究科の日本史の学生に

も教えながらやっているところがあるので、この部分はうまくいっているところだなと思う。

○瀬川教授 200人、300人というのは、東京や大阪だったら多くないかもしれないが、人口規模の小さい地方都市では、かなりものだと思われる。

○佐々木委員 年齢層はどうか？

○高倉センター長 年齢層は高い。みな高齢者の方ばかりだ。

○佐々木委員 こちらの東北アジア学術交流懇話会の方々も？

○高倉センター長 やはり年齢層が高い人が多い。前は、会費を5000円も取っていたが、最近1000円にしたが、若い人はあまり増えていないかと思う。

○佐々木委員 そこは悩ましい。人気があって集客はあるが、なかなか他との接点が付けにくいというのは。

○高倉センター長 そう。若い人が来るような講座とか講演会ができればなど思いながら、現実的にはなかなか難しいと思う。

○田畑委員 全然違うことで、事務組織のことも参考までに聞きたい。「研究支援組織」というのがあるが、いわゆる専属の事務というのは、専門員の方と主任の方2人なのか。

○高倉センター長 そうだ。

○田畑委員 この3人以外はみな非常勤職員か。

○高倉センター長 はい。

○田畑委員 ほとんどわれわれと同じだ。

○高倉センター長 それに加え、理科系の先生に多いのだが、いわゆる秘書さんを自分のプロジェクトの予算で事務補佐員として雇っている場合がある。

○田畑委員 それは事務室ではなく、自分のところに置いているということか。

○高倉センター長 そうだ。

学内的には小さい組織だが、理科系がいるせいもあって結構予算規模が大きいので、事務は結構大変だという印象を持っている。

以前は、事務室のトップは文学研究科の事務長だった。この組織ができる前史として、教養系の教員と、文学研究科の中の日本文化研究施設という組織が改組されてこのセンターができたので、事務組織的には文学研究科と一緒に、いわゆる事業場としても文学研究科と一緒にだった。それが事務の統合の中で、文学部は事務組織が法・経・教育と一緒にになった。そこで、うちの隣にある建物が国際文化研究科なので、そこと一緒にしたほうが自然だろうということで、今は国際文化研究科の事務長が事務長になっている。

○佐々木委員 また別の話題だが、今までかなりの人数の任期制研究員を輩出されていると思うが、その方々の離任後の状況はどうか。

○高倉センター長 具体的に覚えている範囲で言えば、研究者になった人もいるし、その後不明という方もいる。例えばこのセンター組織一覧の「過去に在籍した教員・研究員」

というところかというと、中国に戻った方、亜細亜大学の講師、九州大学の講師となった方（両方とも任期なし）などだ。

それ以外にも、内蒙古大学の准教授、島根大学、沖縄国際大、尚絅学院大学、岩手大学、などなど比較的、最近は就職している。

○佐々木委員 では、割と人材育成としては成功している？

○高倉センター長 しているだろうと思う。ポストも公募すると優秀な人が来るので、そうすると速やかに就職していってくれるという印象がある。

○佐々木委員 やはりそういう関係がある。

○高倉センター長 はい。本当は院生がそのまま上がってくればいいのだが、院生が少ないということもあって、そうはなっていないという状況もあると思う。

○佐々木委員 公募すると大体何人ぐらい応募してくるのか？

○高倉センター長 全体は分からないが、私自身が、何回か公募した経験では12~13人ぐらいか。書類で審査した上で面接をやるときもあり、面接をやらないでそのまま決める場合もある。寺山先生はどうか？

○寺山教授 10人は来なかった。

○高倉センター長 この制度はもともと民博と同じの機関研究員のポストがあって、その予算が付いており、それが独法化と同時になくなった。そして、名前が教育研究支援者というよく分からない名前になったが、また最近、学術研究員という名前に変わった。

○佐々木委員 最近、若い人たちの就職先は、ポストも少なく、パーマネントなものが少ないので、結構皆さん苦勞している。

○高倉センター長 そのとおりだ。

○瀬川教授 文系の人について言えば、一つ付加価値が付けられるところは、出版物を内部でいろいろ出しているの、そうした機会を活用する権利が生じるというところ。本を出していることで就職に有利だった人も若干はいると思う。

○佐々木委員 『東北アジア研究』は査読付き学術雑誌になるのか。

○高倉センター長 はい。どのように良い雑誌にしていくのかは、いろいろ大変だと思いつながりながら見ている。

あとは、客員研究員とかで来た人が、シンポジウムやワークショップを行うと、「どこか成果を出すところないか？」とか言ってくる人もいる。だが、さすがに英文誌を作る体力はないので、その点では「スラ研はすごいな」といつも思っている。そこはうちとしては今後の課題だなと思っている。

特に理科系のほうは学術雑誌に出してはじめて成果となるので、そういうものに対応できるような体制ができればいいなと思っている。最近少し議論しているところでは、経済学系がやるようなワーキングペーパー的なものを出せば、あれは再投稿可能なので、とりあえずの投稿先として活用される可能性はあるかと。たぶん分野によって違うので難しい

と思うが、もう少し英語の論文とか外国語の論文を出版できたらよいという問題意識はある。

○佐々木委員 それをサポートするような体制はあるか。

○高倉センター長 現在はほぼない。

○佐々木委員 ない？英文チェックをするとか、翻訳する費用をどこかで出すとか、それは厳しいか。

○高倉センター長 はい。比較的研究費の配分は潤沢だと思うので、自分の研究費の中で何とかせよというのが、現状の考え方だ。例えば科研なども、Sを申請したら少し申請経費を支援するという措置がある。だから、できる範囲で英文あるいは、ロシア語でも中国語でもいいが、そういう外国語での成果執筆を促進するような仕掛けは必要だろうとは思っている。

○佐々木委員 では、各研究課題、プロジェクトユニットの努力に任せるということか。

○高倉センター長 そうだ。プロジェクトユニットとしてそのようなことに取り組むのもひとつかと思う。

○田畑委員 何か他に。

○加藤委員 東南アジア研究は、生物多様性が高いとか、おいしいものが多いとか、そういうインセンティブが多くあると思うが、東北アジアでそういう魅力といえば、何が一番だろうか。例えば、乳利用の文化が多いとか、そういう特徴をうまく対外的に示せたらいいのではないか。自然が雄大だとか。

それから、東南アジアに比べたら生物多様性はそんなに高くないけれども、千葉さんの研究にもあるように、大陸に行けばそれなりに生物多様性が高い。植物も、チョウとかも。だから、北である割に生物多様性が高いことなどは大きな魅力になると思う。

○高倉センター長 何が高いのか？

○加藤委員 北であるにもかかわらず、大陸なので日本に比べたら生物多様性が高い。草原生態系の多様性。草原生態系自体、日本にはないし、そういう日本にない独自の生態系があって、しかもそこに高い生物多様性があるというのは大きな魅力だなど思っている。

おいしいものについてはどうなのか？

○高倉センター長 肉はおいしいが、万人がおいしいと言うかは微妙かもしれない。

○加藤委員 発酵調味料が少ないのかも。

○高倉センター長 発酵調味料は少ない。

○加藤委員 それが大きい。

○高倉センター長 乳利用として出てくる馬乳酒くらいだが、それは調味料ではない。

○佐々木委員 発酵食品はあるが、調味料にはならない。

○高倉センター長 それも、モンゴルぐらいまでで、さらに北に上がると、発酵食品はほとんどない。動物の胃の中で発酵したものを食べるという習慣はあるが。

○佐々木委員 あと、シベリアなら酸っぱくした魚がある。

- 高倉センター長 そう。
- 加藤委員 食文化などは、今までないプロジェクトなので、将来性があるかもしれない。
- 高倉センター長 確かにみんなが関わられる研究成果として出すのも、一つの手かもしれない。少なくとも読み物は作れそう。
- 加藤委員 魚も豊富だ。
- 高倉センター長 魚は非常に豊富だ。
- 瀬川教授 何か、東北アジアというと皆が思い浮かべる象徴的なものがないだろうか。
- 高倉センター長 草原とか。でも、少し北に上がるとまた森がある。
- 加藤委員 オーロラはある。
- 高倉センター長 オーロラは、シベリアの北緯 50~60 度ぐらい北になると少し見られる。
- 加藤委員 今、オーロラの観光はアラスカとかノルウェーとかだが、なんで東北アジアのオーロラ観光はないのだろうか。
- 高倉センター長 やはりロシアは行きにくいからだろう。
- 加藤委員 行きにくいからか。
- 佐々木委員 交通の便が悪すぎるせいだろう。
- 高倉センター長 県庁所在地に当たるようなところまでは比較的行きやすくなったが、オーロラを見るためには、さらにそこから飛行機に乗って行く必要があり、観光基盤が全然発展していない。
- 佐々木委員 やはり寒すぎるのではないか。
- 高倉センター長 そうかもしれない。
- 佐々木委員 恒常的にマイナス 40 度とか 50 度とか、当たり前だから。
- 高倉センター長 11 月ぐらいでマイナス 20 度ぐらい、12 月に入ってからマイナス 30 度を超えるかもしれない。
- 佐々木委員 普通の観光客は行かないだろう。
-
- 瀬川教授 では、当初予定していた時間になったので、最後にお三方の先生方から、一言ずついただければありがたい。
- 加藤委員 「東北アジア」という枠組みを普及させるという、大きな理念には非常に感銘を受けた。それぞれの分野で東北アジアの魅力を伝えようと大きな成果を上げているということもよく分かった。
- 佐々木委員 私も東北アジアを研究してきた人間だが、まだまだ奥が深い分野だし、いろいろな学際研究の可能性もまだまだあると、しみじみ感じた。期待している。
- 高倉センター長 ありがとうございます。

○田畑委員 私は、うちのセンターとどこが違うかという点でいろいろ分かって、大変勉強になった。やはり、文理連携はなかなか進めるのが難しいので、いろいろ考える機会になった。どうもありがとうございました。

○瀬川教授 それでは、謝辞を。

謝辞

○高倉センター長 今日は3時間にわたって、こちらの拙い情報提供等にもかかわらずさまざまな観点でご議論いただき、誠に感謝に堪えない。特に、先生方の議論で、東北アジア研究センターの新しい研究課題のようなものもご提案いただき、あるいは研究倫理の問題とか、われわれのほうでは避けてきたの課題についてもご提言いただいたことは、今後のわれわれの運営にとって大変重要な示唆になると思う。

東北アジア研究センターの一つの特徴として文理融合、文理連携、あるいは学際的な要素というものを強めていく必要があるということ、今回の議論を通してあらためて実感した。今後の運営に、それらがうまく伸びるような体制をつくっていければと思った。

あとは、いろいろな意味で制度的に難しさを感じている部分もあるが、プロジェクト研究部門のユニットの体制というものが今回随分と評価していただいたので、これをもう少し持続可能な形にし、かつ、いろいろインセンティブを高めていくような仕組みをつくっていくことが大切なのだと、今日の評価の議論を通して実感した。本当にどうもありがとうございました。